

11月3日 年間第31主日

知 11:22～12:2 IIテサ 1:11～2:2 ルカ 19:1～10

1. ルカ

v.9 「イエスは言われた。“今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。”」

福音書を通して使徒たちが宣教しているは、“神が既に聖書の中で預言者を通して約束され”(ロマ 1:2) していた“救い”が、“この終わりの時代に、御子によって”(ヘブ 1:2)訪れたという福音であります。この福音は、今や“信じる者すべてに救いをもたらす神の力”(ロマ 1:16)であることを、ルカはこの物語りによって訴えました。それは、“神の恵みにより無償で”(ロマ 3:24)与えられる救いであって(マタ 20:1-16、ルカ 15:15-32 参照)、決して人間の徳や功績にではなくて、神の義(イザ 53:11= Iペト 2:24、ロマ 3:22)に基づくものです。しかも、ザアカイが“生まれながらのユダヤ人”(ガラ 2:15)であったからではなくて、“ただイエス・キリストへの信仰によって義とされて”(ガラ 2:16)、“約束にあずかる救い”(ロマ 4:16)を受けたという意味で、「この人もアブラハムの子なのだから」と言ってもらえたと理解すべきでしょう。

聖書を自分で学んだことのない人は、この物語りだけを前後関係から切り離して、福音としてではなくて単なる人情論で理解してしまいます。孤独で人々から白眼視されていた徴税人ザアカイを、イエスが大きな愛で包んでくださったので、彼は感激して施しを誓い、これまでの不正な行為を回心したという美談が、福音の代替物になってしまうのです。現代人の多くに、“救い”という言葉が使徒たちが宣教したようには理解されず、“義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って受け継ぐ”(IIペト 3:13)“神の秘められた計画”(Iコリ 2:1)とは何の関係もない別のことのように思われているのは、そのためです。

v.10 「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

この“人の子”という呼称の意味する深い内容を、理解しましょう。「人の子が栄光を受ける時が来た」(ヨハ 12:23)と言われたイエスの言葉を、僕の歌④の冒頭の「見よ、わたしの僕は栄える。はるかに高く上げられ、あがめられる」(イザ 52:13)と結びつけて、御自身を永遠の贖いの供え物として献げられた救い主の意味に解釈した原始教会の福音理解から、この呼称は決して切り離し得ないからです。

2. IIテサ

v.11 「どうか、わたしたちの神が、あなたがたを招きにふさわしいものとしてくださり、……」

“招きにふさわしいもの”とは、私たちがやがて受け継ぐ“神の国にふさわしい者”(1:5)のことであって、それは“主イエスが力強い天使たちを率いて天から来られるとき”(1:7)に実現します。“聖なる者たち”(1:10/= キリスト者)とは、神の国の相続人のことであって(ロマ 8:17 参照)、“聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証”(エフェ 1:14)でありますから、歴史の教会は今日に至るまで“地上の典礼において、天

上の典礼を前もって味わってこれに参加”して来ました(典礼憲章 8)。

現代の教会だけではなくて、すでに初代教会の時代にも、“神の秘められた計画”を信じることの出来ない人たちがいました。“主の日は既に来てしまったかのように言う者”(v.2)、“死者の復活など無いと言っている者”(I コリ 15:12)、“主が来るという約束は、いったいどうなったのだと言う者”(II ペト 3:4)がいる原因を、歴史におけるその実現が遅れたからであると説明するのは正しくありません。使徒たちの宣教を通して神のことに耳を傾けるということの出来ない人たちは、初めからいたのです(ルカ 16:31 参照)。

しかし、「かの日、主が来られるとき、主は御自分の聖なる者たちの間であがめられ、また、すべて信じる者たちの間でほめたたえられるのです。」(1:10)

3. 知

v.23 「全能のゆえに、あなたはすべての人を憐れみ、回心させようとして、人々の罪を見過ごされる。」

それは、時が満ちて(ガラ 4:4)、イエス・キリストによって神の義が示されるためでありました(ロマ 3:21-26)。福音が正しく宣教され、「キリストが食べ物となられ、心は恵みに満たされ、将来の栄光の保証が与えられる」(典礼憲章 47)ミサがささげられているところでは、いつでも“今や、恵みの時、今こそ、救いの日”(II コリ 6:2)が実現しているのです。

今年出版された「第二バチカン公会議公文書改訂公式訳」が、総序の結びで述べている次の言葉を、我が国のすべてのカトリック信者への司教団からの切なる呼びかけとして、受け止めましょう。

“公会議の最重要課題であった教会の自己認識と刷新はこれからも継続されなければならない。”

アーメン、ハレルヤ。

11月10日 年間第32主日

Ⅱマカ 7:1-2,9-14 Ⅱテサ 2:16~3:5 ルカ 20:27~38

1. Ⅱマカ

v.2 「我々は先祖伝来の律法に背くくらいなら、いつでも死ぬ用意はできているのだ。」

v.14 「たとえ人ので手で、死に渡されようとも、神が再び立ち上がらせてくださるという希望をこそ選ぶべきである。」

B.C.175年にアンティオコス四世エピファネスが王位を継承すると、彼のヘレニズム化政策に対する“ユダヤ人としての生き方を貫いてきた者たち”(8:1)の激しい抵抗に遭い、やがてユダ・マカバイの反乱を経て、セレウコス王朝は衰退へと向かうこととなります。この歴史の経過に関して、当時エルサレムの祭儀共同体そのものの中においてもいろいろな立場があり、決して一致していたわけではありませんでした。私たちの旧約聖書続編に収められているマカバイ記一・二は、マカバイ家の立場にはっきりと賛成の見解で叙述されていますが、しかしそれは、ダビデ王国を回復するという夢の実現(使 1:6 参照)には至りませんでした。そしてB.C.63年以降、シリア・パレスチナはローマの支配下に置かれて、イエスの時代に至ります。

政治的にはその支配を確立することの出来なかった、いわば少数者たちによって主張された“ユダヤ人としての伝統的信仰”の叫びを、私たち教会は今朝の朗読配分を通して聞いているのです。決してこの世の多数決や人気投票によってではなくて、神御自身が教会にこの“主日のミサの朗読配分”を与えてくださったのだと信じる人だけが、また神のことばに耳を傾けることが出来るのです。

2. ルカ

v.38 「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きるからである。」

イエスの時代のサドカイ派は、当時の議会における多数派でありました。福音書にしばしば登場するファリサイ派は、実際にはA.D.73年にユダヤの国が滅亡して後のユダヤ教において初めて有力になったのであって、イエスの時代には少数派でありました。つまり“復活があることを否定する人々”が多数派であるという状況の中で、イエスは神の国と終わりの日の復活、永遠の命に至る福音を宣教されたのでした。

神は、やがて神の国に復活した人々にとっての神となり、「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる」(黙 21:4)という希望を与えてくださったのは、十字架のキリスト、復活のキリストであります(ロマ 4:25~5:11 参照)。

先週の学びの中で私は現代の教会を評して、“救い”という言葉が使徒たちが宣教したようには理解されず、“義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って受け継ぐ……神の秘められた計画”とは何の関係もない別のことのように思われている……と書きました。神の啓示に関する教義憲章は、「書

かれた神のことばや伝承された神のことばを正しく解釈する任務は、ただ教会の生きた教導職のみに委ねられており」(10)と述べ、司祭の養成に関する教令にはその神学教育の項で、「全神学の、いわば魂でなければならない聖書研究を、学生は特に熱心に学ばなければならない」(16)と書かれています。しかし現実には、カトリック教会で司祭に叙階される候補者の多くが、正しく準備されてはいないのが事実なのです。

キリスト教的な道徳、政治、経済、それもほとんど実現などしそくない理想や夢を語る説教を、私たちはこれまでどれほど聞かされて来たことでしょうか。しかし、神の国の約束や終わりの日の復活、永遠の命の希望についてのメッセージを、会衆が司祭の説教から聞くことは極めて稀でありました。

それでも神は、“主日のミサの朗読配分”を通して、自らの教会に“神のことば”を語っておられることを信じる事が出来、そしてそれを聞き取る事の出来る人は幸いです。

3. II テサ

v.16 「永遠の慰めと確かな希望とを恵みによって与えてくださる、わたしたちの父である神……が」

新約聖書で“永遠”と翻訳されているのは αἰών であって、“世”と訳される場合には“この世”と“後の世”の両方に使われる言葉です(マコ 10:30)。“永遠の慰め、希望”というのは“永遠の命”の場合と同じく、後の世すなわち来るべき神の国の慰め、希望、命のことを言っているのです。

近代人の多くは、聖書の語る復活も来るべき神の国も本気で信じなくなったために、新約聖書で使われている“永遠”の意味が理解出来なくなってしまいました。実際、主の祈りの副文を締めくくる“国と力と栄光は、限りなくあなたのもの”や、ニケア・コンスタンチノーブル信条の中の“その国は終わることがありません”が何を意味しているのかを理解している信者は稀少なのです。しかし、この神の国を待ち望む“希望と慰め”という前提を抜きにした“善い働き、善い言葉”(v.17)がいくら語られても、それは福音の宣教にはならないし、そのような説教から人々が“神のことば”を聞くことは、決して起こり得ません。

このように、「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」(マタ 22:14)のです。しかしそれにもかかわらず、カトリック教会には“委ねられた信仰の遺産”(カテキズム/使徒憲章)があることに信頼し、“わたしたちの罪ではなく教会の信仰を”(教会に平和を願う祈り)主が顧みてくださることを願って、私たちは「静かにささやく声」(王上 19:12)に耳を傾けようではありませんか。なぜなら、私たちに与えられている神の国の約束は、「主イエス・キリストの栄光にあずからせる」(2:14)救いであり、希望の光だからです。

アーメン、ハレルヤ。

11月17日 年間第33主日

マラ 3:19～20a IIテサ 3:7～12 ルカ 21:5～19

1. ルカ

v.6 「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」

このイエスの言葉から連想される歴史上の出来事について、私たちは B.C.587 年のバビロンによるソロモンの神殿破壊(王下 25:8-12、歴下 36:19-20)と、A.D.70 年のローマによるヘロデの神殿の破壊を知っています。特に後者の破壊は徹底していて、A.D.638 年にアラブがこの地を占領して 7 世紀末に今日のモスク(岩のドーム)を建てるまで、神殿の丘は全くの廃墟のままであったとされています。

しかし、イエスが語られたのは終末の預言であって、将来の歴史に関する特定の出来事の説明ではありませんでした。各共観福音書の記述はいずれも黙示文学的表現に徹しているという点で、共通しています。主の再臨の日まで「(信仰の)忍耐によって、あなたがたは(復活の)命を勝ち取りなさい」(v.19)と、今朝の朗読配分を通して神は私たちに呼びかけておられるのです。

終わりの日(ヨハ 6:54)のキリストの来臨を待っている歴史の教会にとって、最も基本的で大切な一事は“福音を証しする”ということです。vv.12-15 の意味は、信者が既に聞いて信じている福音(コロ 1:5-7)を弁明するときには、「言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる」(12:12)ということであって、普段は福音について無知であってもよいという意味ではありません。「ポンティオ・ピラトの面前で立派な宣言によって証しをなさったキリスト・イエス」(Iテモ 6:13)の福音を、学び、理解するということをしなければ、イエスの語られた終末の預言は空しいただの昔話になってしまいます。

2. IIテサ

言うまでもなく、“怠惰な生活”や“余計なことをしている”(v.11)とは、信仰に関することを指しているものであって、いわゆる現代のニート(就学、就労、職業訓練のいずれも行っていない若者)の話ではありません。現代の教会には、“使徒たちが伝えた福音の教え”(2:15)、“信者が教会から受けた福音の教え”(3:6)を学んで、“神の国への招きにふさわしい者”(1:11)になるという最重要事に関して、まさに“怠惰で、余計なことしかしていない”信者が非常に多いのです。

「信徒は世俗の中に生きている」(教会憲章 31)とは、信者はこの世の善行に励んでいれば、福音を学んで理解するなどという必要はない、という意味ではありません。そのような専門的なことは教導職に任せおくという誤った理解に対して、カトリック教会は「信徒使徒職に関する教令」によって指針を与えました。

教皇も、司教も、そして司祭も、だれも、福音に無知な信者を神の国に連れて行く特別な権能を持っている訳ではありません。使徒パウロは言いました。「神は、…わたしたちの主イエス・キリストの栄光にあ

ずからせるために、わたしたちの福音を通して、あなたがたを招かれたのです。」(2:14) その伝えられた福音を信者一人一人が理解し、信じるという労苦なしには、“信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れる”(Iテモ6:12)などということは不可能であると知りましょう。

3. マラ

v.19 「見よ、その日が来る、炉のように燃える日が。」

v.20 「しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには、義の太陽が昇る。」

終末は、人間の行為によって地球に訪れる破滅ではありません。戦争も、天災も、地球温暖化も、原発事故も、地上に終末がやって来る原因にはなり得ません。また教育も医療も、政治運動も平和活動も、決していささかも神の国の到来を促進したりはしません。もしそのような説教がどこかの教会で聞かれるなら、それは間違っています。

ただ神の愛が、その偉大な摂理と権能が、“この世”を終わらせ、“後の世”を来たらせる“秘められた計画”を実現されるのです。“その日”を来たらせる方は神であって、人間ではありません。教会は「義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」(IIペト3:13)

アーメン、ハレルヤ。

11月24日 王であるキリスト

サム下 5:1～3 コロ 1:12～20 ルカ 23:35～43

1. ルカ

v.43 「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる。」

十字架につけられたイエスの周りに、二種類の人がありました。一方はイエスにこの言葉をかけられた“もう一人の犯罪人”であり、他方は「自分を救うがよい、自分を救ってみろ、自分自身と我々を救ってみろ」(vv.35,37,39)とあざ笑い、侮辱し、ののしる人々でありました。

前者にとって救いとは、復活の日に王であるキリストに思い出していただき、神の国に迎え入れていただけることであり、後者にとって救いとは、無事に十字架から降ろされて死なずにすみ、助かるということでありました。この方がよく分かったと、多くの方が思っています。実際、“罪の赦し、体の復活、永遠の命”を本気で「神の約束に従って待ち望んでいる」(IIペト 3:13)信者は、教会の中でもごく少数者なのです。

昨年10月11日に始まった「信仰年」が今、王であるキリストの祭日で終わります。贖われ罪を赦された人々(エフェ 1:7)にとって、キリストは終わりの日の復活を約束してくださる神の国の王であります(ヨハ 6:43-58)。しかし今、人々に侮辱され、ののしられている十字架上のイエスは、民衆が期待するような助けや解放を何一つ与えることの出来ない、無力な犯罪人に過ぎませんでした。この方が「生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト」(IIテモ 4:1)、すなわち全世界の王であるということを知るには、信仰が必要なのです。この一年、そのような意味での信仰を、たとえおぼろげにでも捉えることの出来た信者は幸いです。

福音書に描かれている主の受難の物語りで、その場面に登場する人々の圧倒的多数は、ただの傍観者たちでありました。しかしその時、今まさに死を迎えようとしている一人の犯罪人が、自分の十字架の上でキリストの救いを得たのです。教皇ベネディクト十六世はその自発教令の中で、「わたしたちは、教会が忠実に伝えてきた神のことばと、弟子たちを生かすために与えられたいのちのパンの味を再発見しなければなりません」(信仰の門3)と述べていました。「信仰年」を終わるにあたり、事実この一年、圧倒的多数のカトリック信者もただの傍観者に過ぎなかったとしても、それでも確かに、神のことばに捕らえられて王であるキリストを見出した、「恵みによって選ばれた者が残されている」(ロマ 11:4-5)ことを、私たちは信じてよいのです。

2. コロ

w.12-13 「光の中にある聖なる者たちの相続分に、あなたがたをあずかれるようにくださった御父……。御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。」

キリストが教会とこの世界との王であるのは、神がこの方の贖いの業によって世を御自分と和解させて(v.20、IIコリ5:18-19)、聖なる者たち(教会)を御自分のものとなさった(使20:28)からであって、私たちキリスト者は「この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです(v.14)。ですから、教会が宣べ伝える福音は、この“神との平和”(v.20)に基づくものであって、単なる道德主義による社会的活動や、個人的内面的な敬虔主義と同じものではありません。聖書が語っている宇宙的な、世界全体を包む救済史的視点というものが欠けているために、本当の福音とは言えないような“疑似福音”を、現代の教会はしっかりと見分ける必要があるのです。

「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る。」(黙1:7)

3. サム下

v.3 「ダビデ王はヘブロンで主の御前に彼らと契約を結んだ。長老たちはダビデに油を注ぎ、イスラエルの王とした。」

しかし復活によって“あらゆる名にまさる名を与えられた”(フィリ2:9)キリストは、地上の王国を建て直す(使1:6)ダビデ王の再来(ルカ1:32-33)以上の方でありました。

「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。」(ロマ1:3-4) そして教会を、新しい契約の民として贖ってくださいました。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。」(ルカ22:20)

王であるキリストの祭日は、聖なる者たちが復活の希望を新たにする、典礼暦最後の主日です。

アーメン、ハレルヤ。